

言葉を話す太鼓に託す名前

前回紹介した論文の中で、木村はコンゴ盆地に住むバントゥ語系のモンゴ諸民族の一派、ボンガンド人の「太鼓名」に短く触れている[木村大治「ボンガンドにおける個人名」『アジア・アフリカ言語文化研究』52, 1996]。これは、いわゆるトーキング・ドラムによる伝達専用の人名のことである。太鼓名は、他の地域には皆無だともではいえないにしても、熱帯アフリカで最も高度に発達し、かつ広く見られる、独特の、著しくアフリカ的な名前である。今回は、この太鼓名を紹介して考察してみたい。

なお、読者は、それが暫く前（第56回）に取りあげた日本人の名前の非分節的な要素の一つである声調の問題に遠く繋がっていることに、間もなく気付かれるはずである。

■言葉を話す太鼓

鐘や太鼓などの鳴り物や楽器による情報伝達は、古今東西、世界中で広く行われて来た。軍隊のラッパ信号は、その最も効果的な例といえよう。太鼓は音の強弱や長短を、ラッパはさらに高低をも組み合わせて信号音を作り出すことができる。太鼓でも2個以上を同時に用いればラッパに劣らない効果を達成できるだろう。

しかしながら、それだけでは信号による合図を伝える太鼓でしかなく、決してトーキング・ドラムにはなりえない。トーキング・ドラムとは、合図ではなく言語を伝える太鼓、いわば「言葉を話す太鼓」のことなのである。トーキング・ドラムは予め決められた、限られた数の信号を再現するのではない。私達が口で言葉を話すのと同じように、当意即妙に単語を組み合わせ、自由自在に心を表現できるのだ。このトーキング・ドラムによって伝達される言語を太鼓言語（drum language）と呼ぶ。

トーキング・ドラムと呼ばれる鳴り物は、二つに大別できる。その一つは、全体が丸太をくり抜いて作られ、材質や形態では木魚にも通じるものである。幾つかの型があるが、いずれも中央部を大きく割いて走る細長い開口部をもち、スリット・ドラムと総称されている。開口部の両側に位置する唇部の厚さとその下の共鳴腔の体積を変えて非対称の構造にすることで、両唇部の打撃音に明確な高低差が設定される。木魚や魚板は、これに似ていても、両唇部の打撃音に差がなく、相称的有構造をもつ点でトーキング・ドラムとは明確な差異をもっている。そして、もう一つの型は、木か、瓢箪など木に類する材質の筒状の胴の上端部に皮を張った大小2つの太鼓を組み合わせ、高音と低音を打ち分けるものである。

■声調言語の似姿を打つ

ただし、「言葉を話す太鼓」とは何かを考える場合、次の事実を理解することが最も重要になる。つまり、或る種の太鼓がトーキング・ドラムたり得るかどうかを決定する主因は、太鼓の属性それ自体にあるのではなく、むしろその太鼓を伝達手段として用いる言語集団の〔音声〕言語の属性にこそあるのだ。

前節からも推測できる通り、トーキング・ドラムが利用する最も重要な音の要素は、高低2音による2項対立である。つまり、「言葉を話す太鼓」の音色は下敷きとなる〔音声〕言語の二つの声調に、しかもほとんどそのみに擬態する。だから、ある種の太鼓が「言葉を話す太鼓」であり得るためには模倣される言語が、高低二つの声調の差異を主要な弁別要因とするタイプの言語でなければならないのだ。

太鼓を伝達手段として用いる言語集団の言語

がこうした性質をもたない限り、たとえ音の高さが明瞭に区別できる2つの太鼓を組み合わせで伝達に用いたとしても、決して「言葉話す太鼓」にはなりえない。それらの太鼓の作り出す音には、それを用いる人々の言語との間の構造的な相同性が欠けているがゆえに、せいぜい固定的な信号音となり得るに過ぎないのだ。

さて、太鼓言葉が用いられるのはどうしてだろうか。遠隔的な伝達力の大きさ、秘儀性の付与、情緒を高揚させる力などをその理由として挙げる説がある〔川田順造『聲』、1988〕。

■ボンガンドの太鼓名

太鼓名の詳しい考察には、ボンガンドの事例が先案内となってくれそうだ。木村は、主な特徴として、次の4点を挙げている。(1)高低の音だけで指示するので非常に長くなる、(2)表現が詩的で意味を汲み取るのは容易でない、(3)日常会話に頻出する諺が組み込まれているらしい、(4)一部分が通常の音声言語で用いられる名前に転用される場合がある。

さらに、太鼓名をもつ確率は男性(82%)の方が女性(55%)よりも高いという。ただし、二つ以上の太鼓名をもつ者は、男女共に一人もいなかった。というのは、(複数の)太鼓名を先祖から受け継いだ場合でも、それらを「つないで一つにしてしまう」からのようだ。

そこで、木村が論文の付表に挙げている四つの太鼓名の事例を見てみよう。Belombe Itokoという1963年生まれの男性は、Bokakakasa'a losombo, bolotsi'akuma le'eseka(男、彼のものはすべて彼の姉妹の所にある)、Batokuta Itokoという1969年生まれの女性は、Bombenge la'akindaki'atsind(ダイカー[小型のカモシカ的一种]は隠しておくのが難しい)、Mboka Losokoという1953年生まれの男性は、Lokulakoko lotefelaki kolikoli(Lokulakokoという鳥はkolikoliと鳴く)がその太鼓名である。

恐らく上記(4)の点に触れて、木村は、「太鼓名の一部をあだ名のように使っている例が若干あった」とも記している。ただ、これらの例や

次に示すもう一例では、太鼓名と他の名前の間には特別の関連性は見られないようだ。

■ジュゲムジュゲム…

上の3例からも、木村が指摘した(2)と(3)の特徴は確認できよう。だが、「非常に長くなる」(1)とまではいい切れまい。ところが、第4の、Bongoli Eteongoloという1914年生まれの男性の例を見ると、なるほどと頷かざるを得ない。彼の太鼓名は、Losinganyi'a tombele ta ndako. Banjoka nde'otema nkele. Bondeliake non gokotsikela. Loola la'indembo la'indembo. Lotsikala la'ato' a'akeneke. Lokindalikambo yo' okindakinda. Yaeya yatsesi'enanga. Bon yamanyama bose'anya'akombola. Yooko yo' ombongo lalukaki…であるという。

これを訳すと、「私はあなたがたの苦しみを理解する。あなたがたは私を悪いと思う。あなたがたが私を待たないと、私はあなたがたを置いていく。天は人を驚かす。驚かす。私はほかの人と残る。私はむなしい苦痛を感じる…」となるらしい。

この太鼓名は幾つもの文からなっていて、確かにうんざりするほど長い。しかも、これで全部ではないらしいのだ。上記の論文で丹念に実証的な資料を引いて挙証している木村も、この場合ばかりは既に十分と見たのか、「…(以下略)」と唐突に言い捨てている。恐らく彼もうんざりしたのだろうが、この続きがどうなっているのか知る術もないのが残念である。

太鼓名は高低の音だけで指示するので非常に長くなるという、上記(1)の説明に加えて、ここで、太鼓名の「秘儀性」や広域的な伝達力、あるいは感情を高揚させる力〔川田、前掲書〕なども考え併せてもいい。それでもなお、我ながら不謹慎だとは思いつつも、落語の「寿限無寿限無五劫の擦り切れ…」や、溺れかかった子供の長い名前を親が必死で唱えている内に手遅れになってしまう小咄がつい思い出されるのである。

(こんま とおる 神奈川大学 社会人類学)